

た母と桜子の再会がなり、三年の別離ののち、二人は連れ立って家郷に歸る話である。この母と子の家郷には、木華開耶姫を祭り、二人はその氏子であるから、桜のゆかりは甚だ深いといわなければならない。

土浦の町も人も桜川と桜には甚だ縁が深いといわなければならない。桜川が土浦の町と接触するあたりの堤上に桜が植えられたのは、そもそもその始めはいつか知らない。いま、銭亀橋の上流數十メートルのところに祭つてある道祖神の境内の植桜碑によれば、

「明治四十三年一月行方郡大和村大字白浜辺田条蔵桜樹二百本ヲ寄贈セラル仍テ同志相謀リテ之ヲ銭亀橋西桜川堤上道祖神祠ヲ挟ミテ三百余間ニ配植シ且日露戦役戦勝記念トナス云々」とあり、その後銭亀橋の東でも桜を植えて、「今や墨堤ノ花ト其ノ研ヲ鏡フ」ことになったのだという。この文を刻んだ碑は、昭和六年の建立である。

桜川の名を実物よりも先に私は耳にしたと思う。土浦一高（旧の中学）の校歌は不変であり、ここに学ぶ生徒の数だけ変えて歌うことは今も変るまい。

春の弥生は桜川、その源の香を載せて、流に浮ぶ花筏

……それは少年達に伝統の美学にもとづく若干の風流を教えたものである。

桜川を実見したのは……いやその岸辺近くたびたび行くようになったのは、中学二年の頃かと思う。世は不景気で、人心は暗かった。物思う年令のはじまりと、この川との初対面が同じ時にあたり、桜川を中心とする風光は、少年の心に浸みた。駅前に住むようになってからは、少年の心に浸みた。駅前に住むようになってからは三好町の通りを抜けて川のほとりに出て、それから上流に向つて堤の上を歩き、銭亀橋のたもとで大町の通りを横切り、旧市街の家並みがつきる道祖神のあたりまで歩くこともあつたし、時には虫掛の橋近くまで行くこともあつた。

かつての三業組合が集まつたあたりは、あだにしてないな妖氣を川面にまでただよわせ、少年子女の反発ををさそいつつ、しかも好奇心を刺戟してやまなかつた。

常磐線の三好町に近い鉄橋のあたりから始まる桜並木は樹幹の直径三十センチ前後で、天場を挟んで両端に勢よく伸び、上流虫掛までも、それから先までも続き、花のアーチ、葉桜のトンネル、葉もふるい落した裸木の並